

はじめに

世間一般にある動物の本は、読者を朗らかな心持ちにさせてくれるものが多い。例えば動物の写真集である。可愛い猫の写真などをみるのは私も大好きで、愛らしい猫の姿を眺めていると何とも幸せな気持ちになる。動物を主人公にした漫画や絵本も、楽しくてほのほのするものが多い。こういういかにもなものでも、動物が主題になっている本はおおむね動物に関する興味深い知見を提供するもので、読むと知識欲が満たされて嬉しくなるのが普通で、何ともいえない居心地の悪さを感じたり、激しい衝撃を受けて思わず反発したくなったりしてしまうというようなものは、あってもごくわずかである。

まさにこの本は、そのごくわずかな中にあっても読者の気持ちを一際かき乱す可能性があるものである。

それはこの本の主題とその扱い方による。

この本の主題は人間の動物とのかかわりであり、そのかかわり方の是非である。この本を書くにあたって私は、できる限り事実をそのままに粉飾することなく描写し、その上でその事実

から目をそらすことなく、その事実にあつちしい価値判断を当てはめようと努めた。そうして描写される事実の中には、現行の社会では一般にタブー視されて触れられないようにされているものもある。しかし私はそういうタブー視を一切することなく、それが人間と動物の關係において重要だとされるテーマならばありのままに描写し素直に価値判断を行なつた。

このような立場で動物を見つめてはつきりと分かつたのは、これまでの人類の動物への扱ひが、一部の例外を除くと基本的に不当なものだつたということだ。これまで人類は、それが同じ人類同胞だつたら決して許されないような仕打ちを、動物に対して行なつてきた。つまり人間は、動物はただ彼らが動物であるという理由だけで自由氣ままに取り扱つていいと考え、その生殺与奪をほしほしにまゝにしてきたということである。

人間は人間に対しては、力の強い者が弱い者に対して好き勝手に振る舞うのは不正だと考え、道徳的に非難するとともに法で厳しくそのようなことをしないように禁じてきた。しかし人間が動物を支配する原理は、人間同士では禁じられてゐる圧倒的な暴力である。

これはつまり、人間は動物を基本的に便利な「生きた道具」だと考へて、自分の欲するままに使い続けているということだ。動物は生きてゐるという点では普通の道具とは違ふが、もつぱらそれを使って何かをする手段としてのみ存在するということ意味では道具に他ならない。人間にとって動物は常に生きた道具であり続けているということなのだ。

問題はこの動物の道具視が、かつては大いに合理性があつたが、今や全くなくなつてゐるという点にある。

かつて動物は人間の生活にとつてなくてはならないものだった。農業を考へてみれば明らかだろう。牛や馬を使うことが全て人力で行なうことよりもどれだけ便利なのか、いうまでもない。また交通の要は馬だった。馬がなければ長距離の移動、特に大荷物を抱えてではどれだけの艱難辛苦かは想像に難くはないだろう。そしてこれは人類の負の側面だが、馬は重要な戦争用具だった。馬具の改良は戦力に直結した。馬をどれだけ使いこなせるかが、戦争の勝敗に影響した。動物の使用、特に馬は、これまでの人類になくしてはならないものだった。

つまり動物の使用はこれまでの人類にあつては、文明生活の基本条件の一つだったのである。このように、かつては確かに不正ではあつても、動物を道具として使わないでは文明生活を維持することはできなかった。しかし今は違ふ。畑は牛や馬ではなくトラクターによつて耕され、移動は馬ではなくてクルマや電車で行なう。鳥に乗つて移動したいという人類の夢は物理法則によつて叶え^{かな}られることはなかつたが、鉄の鳥である飛行機で超高速で移動できるようになつたのである。

つまり今や動物は完全に機械に取つて代つたのである。不正であつてもどうしても使わざるをえない根源的なレベルでの動物使用の必要性は、もはや消失したのである。

それなのに人類は相変わらず動物を広範囲に使い続けている。現在の人類による動物利用は、不正だが仕方のない必要悪ではなく、単なる悪に成り下がってしまったのである。

ここからは当然、現行の動物利用のあり方を批判し、動物を使わない文明とライフスタイルを、これからの人類は構築すべきだという話になる。これが本書が訴えようとする主眼である。

どうであろうか。ここまで読んだ皆さんには、全くその通りだと納得してもらえただろうか。恐らくそうではないだろう。むしろ多くの読者がそんなことはないかと反発されるのではないか。

しかし、読者の皆さんには、ここだけ読んで反発するのではなく、是非本文を読んでから、少なくとも本書の中心である第二章と第三章を読んでから改めて考えていただきたい。もちろん、私としても全ての読者を首尾よく納得させられるなどと自惚うめぼれてはいない。しかし本文を読んでもらえば少なくとも、一見荒唐無稽に思えるような私の主張が、実は長く部厚い理論的蓄積に依拠したものだとは分かるだろう。たとえ納得できなくても、確かにこういう意見があり、しかもそれが「動物倫理学」という学問分野を形成している。こういう事実を知るだけでも、それなりの価値があるのではないか。

この本は動物についての本ではあるが、あくまでそのスタンスは倫理学の理論書たらんとすることにあり。現代において倫理の問題を考えるにあたって、動物の問題を軽視することはできないというのは、本文を読めば一目瞭然だろう。現代に生きる者としてアクチュアルな倫理

学の議論をしようとするならば、動物倫理学は避けることのできない一大分野であり、たとえどんなに反発が起きても理論的に妥当だと考えざるをえない主張は、しないほうがむしろ学問的に不誠実になってしまふことである。

それだから、いわば「清水の舞台から飛び降りる」気持ちで、この論争的な著書を世に問おうとするのである。読者がたとえ私の主張に同意してくれなくても、単なる感情的な反発に留^{とど}まることなく、理論的な批判でもって応えてくれることを願ってやまない。